

音楽授業における身体の再考

－ 身体活動を取り入れた小学校低学年の鑑賞の実践を通して －

国府 華子* 戸田 彩華**

* 音楽教育講座

** 附属名古屋小学校

Rethinking the Body in Music Class: Through Practice of Music Appreciation of Primary School Lower Grades Incorporating Physical Activity

Hanako KOU* and Ayaka TODA**

*Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Nagoya Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan

はじめに

「音楽は身体的経験である」(田邊:2019, 103)と言われるように、音楽することは身体を通して行われる。この身体を通す、ということは必ずしも目に見える形での「動き」が伴っているということだけを指しているわけではない。演奏をする際には当然身体の動きが伴うが、例えば、動かずに音楽を聴いている時にも、音楽が持つエネルギーを身体で感じとったり、実際に演奏した時のことを思い起こしながら聴くことがあったり、音楽であるモノ¹が身体と別に存在するのではなく、音楽しているコトを身体で感じるという経験は誰しも持っているだろう。それこそが、例え実際の動きを伴わずとも、身体的経験であると言われる所以である。

音楽教育の場においても、身体活動を取り入れた実践の提案や報告が数多くみられるように、身体の重要性や有用性については認められてきている。しかし一方で、田邊が「身体こそが音楽の一義的な問題となる」にもかかわらず、「特に学校音楽教育では理念的レベルにおいても実践的レベルにおいてもうまく融合されていないように見える」(2019, 103)と指摘するように、身体のとらえられ方は一つではない。

二つの身体のとらえられ方を踏まえつつ、身体活動を取り入れた音楽鑑賞授業の実践から、音楽教育における身体のあり方について改めて見直してみたい。

1. 音楽科における身体のとらえられ方

音楽教育の実践の場において、身体活動を取り入れ、その有用性を指摘している実践は多数報告されている²。学習指導要領にも身体について触れられている部分があるが、田邊(2019, 108)はそのとらえ方を3つのタイプに分けている。一つ目の「コントロールの対象としての身体」は、演奏の際にどのように身体を動かし、コントロールするのかということ指している。二つ目の「音楽の要素や構成を理解する手段としての身体観」は、動いてみることで、音楽の様々な要素を感じとったり、気づいたりすること指している。そして三つ目の「メッセージを伝えるテキストとしての身体観」とは、実際に感じ取ったことなどを身体を使って表現することを指している。このような音楽と身体の深い関わりと、その有用性を否定する者はいないであろう。

しかしその一方で、このようなとらえ方については疑問も指摘されている。金光(2018)は、身体活動を取り入れた音楽活動が「音楽と身体の本質的に重視している。にもかかわらず、『身体表現』がみずから『手段』と位置づけている」(8)ことに疑問を呈している。つまり教育の中では、何かを理解したり、得たりするための手段として「身体」がとらえられてきており、「『生きられた経験』としての音楽における身体」(田邊:2019, 103)という側面が忘れられると述べるのである。

その背景の一つとして金光は「〔共通事項〕のような学習指導要領の規定」(2018, 8)をあげている。音

楽授業の中で〔共通事項〕に取り上げられているような、音楽的な何かに気づくこと、理解することは必須である。そのため、どうしても何かを得るための存在としての身体に目がいってしまうことは否めないだろう。そして、それも身体の重要な役割であることは間違いない。しかし、手段としての身体だけでなく、田邊が言うところの「『生きられた経験』としての音楽における身体」として身体をとらえ直すことは、音楽を理解すること、学ぶことの本質に迫る重要な鍵となるのではないだろうか。

次項では、身体活動を取り入れた鑑賞の実践の概要について述べ、さらにそこでの児童の動きの変化を追ってみることにしたい。

2. 身体活動を用いた授業実践

2.1 実践者のねらい

2.1.1 本実践までの過程

音や音楽を聴いた時に無意識に発生する動きではなく、意図的に動いてみよう、となった際に「最初は動けない」という経験から、動いてみようとする時には積み重ねが必要であると考え、1年生から少しずつ常時活動の中に、聴いて動くという活動を取り入れてきている。

2.1.2 本実践に身体活動を取り入れたねらい

小学校低学年の鑑賞活動では、曲を数回聴き、曲の気分をとらえさせるのみの活動になりがちである。その背景には、「低学年に曲を聴かせると飽きる」「じっと聴いていられない」などと考える授業者が多い現状がある。そこで、子どもが飽きずに「もっと曲の続きが聴きたい」と思えるようにすることや、低学年の発達段階でも曲の特徴をとらえ、曲全体を聴き味わうことができるような鑑賞活動を実現するために身体活動を取り入れた。

また、本実践では、仲間とともに音楽を聴く楽しさを味わうことや、学習集団内の誰とでも関わりがもてるような仲間づくりを意識し、「仲間とともに聴く」ということもねらいとしている。友達と曲について話し合うだけでなく、様々な友達と手をつなぐなど、一緒に身体を動かすという交流を図りながら、曲を聴き味わうことで、心を開いて音楽活動ができるような関係づくりを目指している。

2.1.3 授業を行うにあたって意識していること

「こんな音が聴こえた」「こんな感じがする」ということを、言語で表すのではなく、身体で表すことによって、子どもがどのようなことを考えているのか（音に対してどのようなとらえ方をしているのか）を同時に複数人把握することができる。このことを生かし、2つの事を意識して授業を展開している。

① 子ども主体の授業展開

教師はあまり多く提示せず、子どもの思考の整理や共有のみに徹することを心掛けている。

具体的には、子どもの動きを見て、教師が「どうしてそうやって動いたの？」と発問する。子どもが発問に対して答えたら、追質問をして他の意見を聞いたり、もう一度曲を聴いて確認したりと、子どもの発言によって特徴に注目しながら、曲を聴き進めていくのである。この主体的な授業を成立させるためには、教師からどの子どもに発問するかが鍵となる。そのために、子どもの動きをよく観察し、ねらいに迫る動きをしている子どもに意図的に発問するようにしている。これは、とてもシンプルな教師の発問や役割であるが、ねらいに沿った子ども主体の授業が実現し、子どもが「もっと曲の続きを聴いてみたい」と思えるような授業になると考えている。

② 支援児の発見

じっと聴いている時よりも、曲に合わせて身体を動かす活動の時のほうが、曲の特徴をとらえられていない子どもを発見しやすい。曲の音楽を聴くことに集中できていなかったり、聴くポイントが分かっていなかったりする子どもはじっと止まっていたり、走り回ったりするからだ。

このような状態の子どもは、算数の授業に例えれば、計算問題を解くのに時間が掛かっていたり、解法が分からなかったりする状態であり、他に遅れをとっている状態である。そういった子を見逃さずに寄り添い、一緒に音に耳を傾ける支援をする。また、じっと止まっている子どもの中には、聴くことには支援は必要ないが、自分を表現することに戸惑いがあったりする場合がある。そのような子どもには、どんな動きも間違いがないことや一つ一つの動きを認め、褒めることを繰り返し、表現することの抵抗感を薄くしていくことで、その後の表現活動にも安心感をもって臨めるように支援をする。このような環境づくりのためにも、鑑賞活動での身体活動は有効だと考える。

2.2 実践の概要

対象：小学2年生

時期：2019年5-6月

① 常時活動

「がっきにへんしん！」

子どもに楽器の音色の特徴をとらえさせたいと考え、全身を使って楽器（の音）になりきる音楽遊びを行った。中心活動の鑑賞曲が打楽器に特徴のある曲であるため、ここでは打楽器（トライアングル・ギロ・ウッドブロック・すず）を使用した。内容は、教師が打楽器のいずれか一つを持ち、子どもは、その楽器にふさわしいと思うポーズをする。教師が音を鳴らす時には、その音にふさわしいと思う動きをし、鳴らさな

い時には動きを止めるというものである。トライアングルを提示すると、手で三角形をつくる子どもが多く、音を鳴らすと身体を細かく揺らしながらゆっくり横に傾いたり、手を三角形からゆっくり広げて伸ばすなどして、音が長く続く特徴を全身で感じ、表現する様子が見られた。また、ミュートで鳴らすと小さく屈んで跳んだり、驚いたような顔をしながら息を止めていたり、オープンで鳴らした時の伸びやかさとは全く異なる動きをするようになった。他の楽器でも同様に、楽器の音色の特徴を感じ取り、のびのびと全身で表現する様子が見られた。

② 中心活動

題材：いい音 見つけて

教材曲：ルロイ・アンダーソン作曲

「シンコペーテッドクロック」

第1時 主題をつかむ

曲の冒頭のみを聴かせ、カッコンカッコンというウッドブロックの音に合わせて、手や足などを動かす活動を行った。子どもは、途中で動きと音が合わなくなるところがあることから、ウッドブロックのリズムが変化するところがあるということをとらえた。その後、冒頭部分の音楽に合った動きを全員で考えた。動きを考える際には、「2人以上で行う動きであること」「リズムの変化が分かる動きであること」以上2点を条件とし、条件と音楽に最も合っていると思う動きを1つ決めた。この時間での子どもの曲に対するメモには、「楽しそうな時計の音楽だった」「途中で時計が壊れて変なリズムになっちゃった」「変なリズムが出てくるところが面白い」など、ウッドブロックの音を聴くポイントとして身体を動かしたことから、ウッドブロックの音色やリズムを感じ取り、曲の特徴をよく捉えることができている感想が多くあった。

第2時 曲の全体をつかむ

第1時に聴いた曲に続きがあるということを伝えると、どの子どもも目を輝かせ、曲の続きに興味津々な様子であった。曲を聴く際の条件として、「新しく聴く音楽が聴こえたら静かに座ること」「冒頭部分の音楽は、第1時に決めた動きを行うこと」を示し、鑑賞活動を行った。新しく聴く旋律が出てくる度に、どんな音が聴こえたか、どんな感じがしたか、なぜその動きをしたくなったのかを問いかけ、子どもの考えを共有しながら聴き進めた。そして、第1時に聴いた部分以外は、自分の感じたままに身体を動かしてよいこととした。その結果、この曲がA (a-b-a) - B - A (a-c)の構成でできていることをつかむことができた。曲の全体像が視覚的に捉えられるように、曲の構成やそれぞれの曲想について子どもも発言を板書したが、ほとんどの子どもは、自分の耳で曲の進行を判断し、曲想をよく捉えた動きをしていた。

第3時 グループで動きを考える

第2時での経験をもとに、曲に合った動き（音に合うもの、思い浮かべた様子に合うもの、どちらも可とした）をグループ（5～6人）で考えさせた。グループワークの時間に教師は、「なぜその動きにしたのか」と意図を積極的に問いかけ、子どもの感じたことや考えたことと動きがつながっているかを確認しながら進めた。子どもからは、「時計は丸いからみんなで輪っかをつくったけど、とちゅうの壊れていると思ったところは、手を離れた」という曲から想像したことを基にした動きの意図や、「ウッドブロックの変なリズムの後に、また同じ音楽が繰り返されるから、反対周りにした」という音楽の構造に着目した動きの意図（この場合はフレーズ）が挙がった。どのグループも、仲間と協働しながら曲と向き合い、1つの作品を創り上げる様子が見られた。

第4時 鑑賞

第3時の最後にそれぞれの作品を録画したものを、全員で鑑賞する活動を行った。VTRから他のグループを見て、楽器の音色やリズム、音の重なりが身体で表されていることを称賛したり、自分のグループを客観視して、意図が表されているかを確認したりした。他のグループの動きを見ることで、自分たちとは異なる曲の聴き取り方や感じ方を発見し、新たな曲のよさや面白さに気付く様子が見られた。

2.3 本実践のまとめ

本実践での身体活動を通して子どもたちは、楽しみながら主体的に変化していく曲想1つ1つの特徴を捉えることができ、曲全体のよさや面白さを味わうことにつなげることができた。そのため、低学年の鑑賞活動に身体活動を取り入れることは、有効であると感じた。このような音楽的な評価では見取れない、内面の部分でも以下のような子どもの成長が見られた。

一つ目は、表現することに臆さない子どもが多くなったことである。人前に出ることが苦手な子どもが何人もおり、大人しい雰囲気の子どもたちであったが、自信をもち、のびのびと表現する子どもが増えた。中でもA児は1年生の時から、みんなが楽しそうに腕を大きく振って歌う場面でも、斜め下を向いて、恥ずかしそうに小さな声でもじもじと歌っていた。そのため、なかなか自分の感じたことを身体に表すことが難しかった。しかし、必ず友達と協力する動きを取り入れたことや、少しの動きでも「それもいいね」と認める声かけを続けたことなどから、楽しそうに全身で表現するまでに成長した。これは、歌唱などのその他の表現活動にも生かされ、A児は笑顔でのびのびと歌うようになった。

二つ目は、様々な友達と関わりをもてるようになり

始めたことである。以前は、何人かの友達と手をつなぐなどの指示があった時に、「同性同士」や「仲の良い子」を意識して、グループをつくりたがる傾向があった。本実践で主題が聴こえたら、すぐに近くにいる友達を探してグループを組み、一緒に音楽に合わせて身体を動かすという活動をしたことにより、誰とも関わる必然性が生まれることが、子どもたちの関係性を広げるきっかけになったと考える。また、普段関わりのない友達でも、ともに音楽によって楽しく身体を動かすことで、心がほぐれたことも、友好的な関係性を築くことにつながっていると考える。

このように、身体活動を取り入れた音楽活動では、子どもの音楽的な見方や考え方を育むだけでなく、子どもたちの内面の成長にもつながることが分かった。他の曲の鑑賞や表現活動にも身体活動を生かし、音楽を通して子どもの力を育てていきたい。

3. 音楽授業におけるもう一つの身体あり方

ここで改めて身体活動を取り入れた教師のねらいについて振り返っておきたい。

第一のねらいは、曲の特徴をとらえ、曲全体を味わえるようにすることであった。動いてみることによってリズムの変化や曲想の変化に気づく、他者の動きを見ることで他者のとらえ方に気づく、他者の動きを取り入れてみることで自分の振り返りにもつながり、他者の気づきを体感することにもつながる。何かを得るための手段としての身体が有効に働き、変化していく曲想の特徴を捉え、曲全体の構造をとらえることに成功していると言えるだろう。

二つ目のねらいは、仲間とともに聴く楽しさを味わうことができるようにするというものであった。これについても、音楽的な評価では見取ることのできない内面の変化として、様々な友達と関わりを持つことができるようになったことをあげているように、複数人で動きを試行錯誤していく中で、十分に味わうことができたと考える。

これらのねらいの中で働いているのは、やはり手段としての身体であると言えるだろう。では、この実践の中には「『生きられた経験』としての音楽における身体」は存在しないのだろうか。子どもたちの身体活動を改めて追ってみることにしたい。

最初に本活動に入る前の「がっきにへんしん！」で教師の鳴らす楽器の音を聴いて動く活動を行なっている。本活動に入り、《シンコペイテッドクロック》の冒頭部分を聴き、動いてみる。ここでは、ウッドブロックの音色やリズムに注目してみるという入り口が示されている。さらに、二人以上での動きを考えてみるというルールが提示されたことで、仲間と動きを工夫する活動となる。第2時では、1時で聴いた冒頭の続き

を聴き、曲想の変化や構成を感じ取りながら、動きの工夫を重ねていく。ここでも、初めて登場するトライアングルの音への注目や、新たな曲想に対しての感じ方が教師とのやり取りや仲間とのやり取りの中で深められ、動きに反映されていくことになる。さらに第3、4時を通して曲想の変化や曲の構成をとらえながら、意図をもった身体活動へと展開している。

この流れの中で、注目してみたい点が二つあった。

一つは、音・音楽を聴きながら動かなかった場面である。それは、「がっきにへんしん！」の場面、そして《シンコペイテッドクロック》の冒頭部分を聴き、動いてみようとなった場面である。ほんの一瞬ではあるが、音・音楽を聴きながら全員が止まっている時間があったのだ。

「がっきにへんしん！」で使用された楽器は、子どもたちにとってすでに知っているものであり、つまり触ったことのあるものであり、音も思い浮かべられたはずである。しかし、教師が最初に音を鳴らした時には見事に全員がピタッと止まっていた。どのように動けば良いのかがわからなかった、わからないから音を聴き込む時間が必要であった、さらには、仲間の様子も見ながら動きを取り入れる時間が必要であったと言える場面ではなかっただろうか。それは音を聴きこみ、楽器になりきる時間であったとも言えるだろう。

それは、曲を聴いて動いてみる際にも同様であると考えられる。もちろん《シンコペイテッドクロック》は初めて出会う曲であるため、子どもはどのような展開の曲であるかを知らない。1回聴いただけで特徴をとらえることも難しいであろう。ここでは、ウッドブロックの音に注目するというヒントの提示によって、そこにのってみる動きが現れ始めたと考えられる。

これらが示していることは、音・音楽を聴いて動いてみようとする時、その音・音楽を聴き込む時間が必要であるということ、そして、聴く音楽によっては入り口が必要な場合があるということだろう。

もう一つ注目したいポイントは、グループで動きを考えていく中で起こった動きの意味合いの変化である。楽器の音色やリズム、曲の雰囲気の違いといったヒントから動きの変化を考え、グループで工夫を重ねていく中で、どのような動きで表現するのかという、動き方の面白さを追求する方向へと子どもたちが傾いていった場面があった。例えば、《かごめかごめ》の遊び歌の中で行われるような、数人が手をつないで輪っかになり、ある1箇所から抜けていって全体が裏返しになる、というような動きである。その動きを取り入れた理由は、もちろん音楽的な気づきを表現するためであった。しかし、音・音楽として気づいたことと、頭で考えてみた動きとが合わない、という結果がもたらされる。その後、教師による動きの意図の問いかけや、他のグループの気づき、自分のグループの振

り返り、そして、最後の発表に向けて何度も繰り返して音楽を聴き、グループで動くことを重ねていく中で、音楽と一体となった動きへと変化していったように見えた。

この事例が示していることは、音・音楽を聴いて動いてみることを積み重ねていくことによって変化を繰り返す、音楽と身体が一体となっていくということではないだろうか。動いてみたことで、発見した、わかったというところで止まっていないところに、手段だけではない身体のあり方が見えてきたように思われる。

授業としてのねらいであった「曲想の変化をとらえる」ことだけをみるならば、身体を使って動いてみたことで子どもたちは、変化に気づき、さらにそれを身体を通して伝えるところまで辿りついていた。そこから、さらに時間を費やし、とことん聴き込み、グループでの動きを重ねていくことにより、音楽と一体となった身体の動きになっていったように思える。

おわりに

今回は身体活動を取り入れた鑑賞の授業を取り上げ、そこでの身体のあり方についての見直しを試みた。すでに先行研究でもその有用性が認められている、音楽的な気づきや理解を促し、深めるための手段としての身体だけでなく、少し視点を変えて実際の子どもの動きを見ていくと、そこには手段としての身体だけではない存在が見えてきた。

音楽と身体は深く結びついているが、動いてみようと言われてすぐに動けるというものではない。と同時に、動いていればそれが全て音楽している身体であるか、というところも否であろう。今回の鑑賞の活動においては、注意深く聴き込む時間が必要であり、どこに注目して聴くのかという入り口も必要であった。また、繰り返し聴きながら、仲間とともに動きを工夫する時間も必要であった。

このような時間をかけることで、音楽の何かを理解するだけでなく、音・音楽が自分のものとなり、身体と一体となるのではないだろうか。それは、音を身体で表現するというよりは、音・音楽そのものになってみる、その中に入ってみる、という感覚の方が近いだろう。

何を理解したのかは授業としてはもちろん重要であるが、身体のあり方としては、何がわかったのか、ではなく、どのように掴み取ったのか、という過程にこそ身体が関わっていると言えるだろう。佐藤（1997）が述べる「どんな知識も学び手の身体的な活動に具現化され、学び手の経験のなかに織りこまれることなしには『学び』としての意義をもちえない」（19）と言う指摘とも重なる。

本論の実践の概要には登場しないが、実は指導案に

は「音楽と一体になる楽しさを味わわせる」という文言が入っている。教師自身が「『生きられた経験』としての音楽における身体」ととらえているからこそこの文言であると考えられる。常時活動においても、音を聴いて動くのではなく、「がっきにへんしん」させることで、音の中に飛び込む、もしくは自分の身体の中に音を入れるという経験をすることができたであろう。教師自身が二つの側面をもつ身体をとらえていることで、子どもの中にもこの双方を見とることができるのではないだろうか。

今回は動いてみる活動を取り入れたため、目に見える動きが身体活動のメインとなった。しかし、冒頭でも述べたように目に見える動きだけが身体のあり方を示しているわけではない。音楽の授業の中でも、学年が上がっていくほど、意図的に動く活動は少なくなっていく。高学年においての目に見える動きが伴わない授業の中での身体についても光を当てていきたい。

注

- 1 金光（2018, 12）は「音楽を、音響や作品としてのモノではなく、人間どうしを関係づけていくコト（出来事）として再考する」時に、音楽する主体となる身体が議論の前提となると述べている。
- 2 身体にかかわる研究としては、幼児教育の分野が多く、幼児を対象とした（井中・高橋：2017, 2019, 佐野：2019a, 2019bなど）ものだけでなく、保育者養成の場（藤井：2019, 岡崎：2017など）においても身体活動を取り入れることは、表現力を高める、仲間とのコミュニケーションを深める上で有効な活動であると評価されている。小中学校における先行研究としては、子どもが音楽の要素や形式を理解するために身体活動が有効であるととらえた報告（楠井：2019, 桑原：2008, 2012, 時得・信谷：2010, 時得・金子・飯村：2016など）がほとんどである。

引用参考文献

- 井中あけみ・高橋うらら（2017）「表現活動を豊かにする音楽研究（2）」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』No.34 pp.27-36。
- 井中あけみ・高橋うらら（2019）『「音楽」から考える子どもの自発的身体表現 - 保育者の視点を踏まえて -』『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』No.36 pp.1-19。
- 岡崎裕美（2017）「保育者養成における身体表現・音楽表現の学習の必要性 - グループ研究を通しての学習成果 -」『千葉敬愛短期大学紀要』第39号 pp.373-381。
- 金光真理子（2018）「音楽科における『身体表現』の再考 - 『音楽』と『身体表現』の関係性 -」『横浜

- 国立大学教育学部紀要.1, 教育科学』 pp.1-22。
- 楠井晴子 (2019) 「小学生の音楽鑑賞授業における楽曲のイメージ構築過程にみられる児童の生活 – 身体表現活動をともなう鑑賞学習の場合 –」『学校音楽教育実践論集』 第3号, pp.45-46。
- 桑原章寧 (2008) 「中学校における身体表現の実際 – 指揮的表現による鑑賞の授業 –」『学校音楽教育研究』 第12巻, pp.53-54。
- 桑原章寧 (2012) 「音楽科の鑑賞活動における身体表現の読み取り方 – エスノグラフィーの手法を用いて –」『学校音楽教育研究』 第16巻, pp.226-227。
- 佐藤学 (1997) 『学びの身体技法』 太郎次郎社。
- 佐野美奈 (2019a) 「幼児期の音楽的表現における動きの要素の特徴 – 5歳児の身体的な動きと音楽的諸要素の認識に関する定量的分析を中心に –」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』 第9巻 pp.201-210。
- 佐野美奈 (2019b) 「保育園と幼稚園の幼児の音楽的表現における身体的な動きの要素の変化に関する特徴 – モーション・キャプチャーを用いたMEBプログラムの実践過程の定量的分析を通して –」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』 第9巻 pp.211-222。
- 田邊裕子 (2019) 「音楽教育研究において身体へアプローチすることの重要性 – 音楽の二項対立パラダイムの超克を目指して –」『教育デザイン研究10』 pp.103-112。
- 時得紀子・信谷準 (2010) 「身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み – 小学校低学年の音楽科授業を通して –」『教育実践研究』 第20集 pp.27-36。
- 時得紀子・金子謙太郎・飯村諭吉 (2016) 「初等教育における身体表現活動をめぐる一考察 – 上越及び兵庫教育大学付属小学校の実践から –」『上越教育大学研究紀要』 第35巻 pp.325-334。

(2019年9月24日受理)